
魔法使いの平和？な暮らし

ハヤブサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法使いの平和？な暮らし

【Nコード】

N 6 4 7 5 M

【作者名】

ハヤブサ

【あらすじ】

僕ら魔法使いにもやっと平穏が訪れた。かな？
その暮らしを描いた一筆。
魔法使いシリーズ第四段！

人物紹介

「五右衛門」

本編に入る前に我々の紹介をしておこう。

【忍】

光 忍 現高校2年生だ。魔法戦士である。
我が子孫である。

青龍の使い手であり、青龍が再臨するまでの30年間を青龍として務めることになっている。

いくつもの試練を乗り越えておる猛者と評価したい所だな。

・・・む、ちよつと買い被りすぎか？

性格は活動には積極的だが、内気で優しい方だと思う。
が、ちよつと変わった奴だ。

容姿は骨が浮き出るほどやせており、顔もかっこいいとは言い難い。
しかし自らを格好いいと言う。

つまり、若干ナルシストである。

しかも、剣フェチ、ポニーテールフェチときた。

ある意味で相当のひねくれ者だ。

マーリン・ドウ・ハヤブサ・ドヴォルザーク・ライラルガルウという巨大ハヤブサと契約している。

好きな歌手は平井堅とRYTHEMと言っていたな。

魔法に関しては全般的に出来るが陣型の術をよく使う。

風陣が主だが、幻術も出来る。

ちなみに両親が離婚したおかげで独立したらしい。

父親は光家のいい面汚しだな。

【シオン】

正式名称はファルシオン。青龍刀だ。シオンというのは忍がつけた

名前だ。

青龍から感情と人の姿へと変化する力を与えられた。青龍の武器だな。

しかし、こいつも相当のひねくれ者で、2人しか人間になる方法を知らせていないという。

一人は忍だが、もう一人は誰だかな。

この剣、なんと、忍に恋をしたのだ。しかも忍も忍で剣フェチだからOK。

なんちゅー、コンビなんだろうな。

容姿はスリーサイズも結構あるらしく、美少女的な感じだ。

茶髪で大概、ポニーテールをしている。

本人、1800年ぐらい前に作られたと言っていた。

恐らく、剣の姿でいるときは普通の人間の100分の1の割合で年を食うのだろう。

つまり、大体18歳ぐらいだ。

しかし、何歳まで生きるかは・・・？

そして、忍と結婚している。麒麟のくれた家で同居中だ。

【火影】

光家の長男。26歳ぐらいかな？交通事故で一時死んだが、物好きな錬金術師が蘇生してくれたらしい。

その錬金術師のいたヨーロッパでフェールという名を使って働き、ハリアという少女と会った。

ハリアはヴァンパイアであり、これもまた二人とも恋に落ちた。

どうも、光家は恋仲に関して、運命的な何かがあるらしい。

ちなみに忍とは打って変わってイケメンだ。

しかし、何というか・・・奥手だ。

二人も今、麒麟のくれた家で同居中だ。

陣型の魔法を得意とする。

術は、炎陣と幻術、珍しいことに封印術にも長けている。

【剛】

羽賀 剛。戦士だ。最も重宝する戦士である。顔は童顔だな。普通って所。ナルトのトレーディングカードが好きって言っていたな。

彼、実はある戦乱で力を手に入れるために、ハーリアに自らを噛ませ、ヴァンパイヤになった。

闘心も使えるので、戦士としては万能だ。

剣もなかなか使えるが、結構な割合で剣を折る。

体術、幻術専門だから、仕方ない・・・？

女心に疎く、空気も読めないという超KYな奴だ。

しかし、最近、ある少女に想いを寄せているとか・・・。

【牧人】

草薙 牧人。魔法戦士・・・というより黄竜だ。

麒麟の部下で昔、邪神を解き放つという大ボカをしでかしたせいで人間にされ、地上に降ろされていた。

目的は救世主を捜すため。

んで、見つけ出したのが忍達って訳だ。

一緒に時空のはざまに行ってガーゴイル討伐など行い、その結果、小喬という少女に出会う訳だ。

現在麒麟のくれた家で同居中・・・。

どうやら、ほとんどの術が出来るらしい。

ま、黄竜なものな。

【小喬】

格闘家で闘心を扱う。剛に闘心を教えたのも彼女だ。

彼女は体術専門。体術しか使えない。

姉に大喬という治療師もいる。

二人してすごい美人だ。

【レバー】

高田 正樹。魔法使い。
シスコン野郎である。

バリア張り役でマイナーだが、なかなか魔法を全般的に使いこなしている。

主に使うのは、幻術。

しかし、こいつ・・・もしかしたら、禁術、が扱えるかも知れぬ。

【黒田 将兵】

忍を庇って戦死した兵長。

彼が忍を強くし変えてきた。

大叔母は麒麟の一族である雷雲人。
クロード

もうこれもすでに死去しているようだ。

彼の一族の生き残りは母親にしかない。

【阿部 瑞樹】

朱雀の使い手。相棒は聖斗。現高2だ

あだ名は鬼阿修羅。その恐ろしさは朱雀を一喝するほどだな。
炎陣を最も得意とする。幻術も使う。

【藤 秀作】

白虎の使い手だが登場回数が異常に少ない。現20歳。
雷陣専門。

【武川】

玄武の使い手。おっさんなのにハスキーな声だ。
水陣を使う。

【豹 境南】

忍の部下にて零尾。
体術専門だ。

【ホームズ】
海賊の頭。儂が命を助けたことのある。
若返りの水より何百年も長生きしている。
六尾。目の力で神術や幻術を使う。

【明美】
レバーの妹にして八尾。
術に関しては全く。

【烏山】
総務大臣にて九尾。
封印術を長けている。

【中野】
儂ら光家とは長いつきあいだ。
忍らの学校の教員を務めており、真希人にも手を貸していた。
しかし、教員なのにひげ面。
魔眼を持つ。得意なのは封印術。

【大和】
代々続く封印師の末裔。儂らとの交流も深い。
忍の良き理解者である。

【五右衛門】
儂だな。光家4代目当主。
幕末から生きとる者だ。

一度、幽体離脱現象にあい、何百年か彷徨った後、中野に肉体を戻

された。

やっと今時の言葉に慣れた所だ。

【邪神】

邪神・ニユーヨーク・洋子

これまでの黒幕。

今は時空のはざまごと封印されている。

二度と会いたくない者だな。

全ての術を使いこなす。

【麒麟】

四神と共に儂らを補佐してくれている。
我々を蘇生してもらった時もあつたな。

【溝口 真次】

忍の友人らしい。実際、儂はあつたことはない。

あ、もちろん、一般人だ。

簡単に説明した。これで文句はないか？

あつたら忍に言ってくれ。

次は用語について説明する。

【魔法】

日本の魔法を主に指す。

陣型と術型がある。

陣型は印と呪文で身体のエネルギーを術という形で吐き出す。

術型は印と呪文の代わりに巻物を用いる。

と、言っても術型も少々は術を唱える。

幻術、体術、神術、邪術、妖術、封印術などは陣型でも術型でもある。

【時空のはざま】

今いる世界の裏側と考えてくれればいい。
もう封印されているがな。

しかし、こじ開けることは不可でもない……。
そのようなことが出来るのは神術と邪術が使える物ぐらいだな。

【闘心】

闘う心。戦士にしか習得できない術だ。
これは特別な魔法である。
いや、魔法というのは無理があるか。

【尾獣】

もともと邪神の手下だったが寝返った。
川村家、村沢家、藤井家、須藤家、入江家、南田家、北村家、高田家、烏山家、小泉家、松本家の末裔に宿ると後の調査で分かった。
と言うことは、明美嬢が蘇生されなければレバーに八尾があった訳だ。

【ヴァンパイア】

吸血鬼。噛まれると吸血鬼になってしまう。
他にも、バンパイア、ヴァンパイアなどと言われる。

【封印師】

魔法陣を扱い、主に魔獣の封印を手がけてきた。

【魔眼】

尾獣が十個ずつ持っているが普段は開眼しない。
大概、腕に付いている。
普通の魔法使いでも持っているが複数持っている者は稀である。

こんな感じでよいかな？

さて、いよいよ本編が始まりますな。

我が末裔の暮らしが楽しみだ。

僕らの新婚生活

シオンと同居して始めに……。

僕は前の家から荷物を運んだ。

んで、荷物を解体して物を配置する上で、シオンが嫌がった物がある。

「ねえ、これ……イヤなんだけど。」

シオンが指さす先には……剣のレプリカである。

僕としては居間に置きたかったが、仕方ないので自分の部屋に置いた。

それでも僕の部屋に入ってくるとき、シオンはイヤな顔をする。

そして、彼女は僕の歴史グッズにも難癖をつけてきた。

まあ、剣だから仕方がないか。

しかし彼女が例外に許した物がある。

関羽である。

何かと赤兎馬や青龍刀を褒め称えていた。

……ちよつと嫉妬してしまう。

それで彼女も三国志に興味を持ったようだ。

と、言う訳で今日の朝も三国志の話をしている。

「……ちゅーことで、関羽は曹操に降ったんや。」

「へー。武士なのに主君に背くとはね。」

シオンの焼いてくれたトーストを食べながら僕は説明する。

「僕の解釈だけど、自分が死んだ方が劉備は悲しむんじゃないかって思ったんちゃう？」

「ふうん。」シオンはコーヒーをすすった。

時計を見て僕はアッと叫ぶ。

「もう行かなくちゃ。留守よろしく！」

僕はカバンを持って玄関に行く。

僕が靴を履いているとシオンが近づいてきた。

「ねえ、今日は帰ってくるの？」

「ん？」この頃、部活だから帰る時間がまちまちなのだ。

「ほー。長年、一人でいたのに、寂しいとはね。」ちよっと皮肉ってやると

「ば、バカじゃないの！」彼女はツンとそっぽを向いた。

「・・・でも、早く帰ってきてね。」「ああ。」

僕は玄関を出た。

ツンデレの割には素直だよな。

んで、放課後、遺跡研究部に出席。

というより、部長だから出席しなければならないのだが。

板橋の研究を計画した後、僕は家に帰った。

・・・飛んで。

「おっす！帰ってきたぜい！」

僕が扉を開けて開口一番に言うと、

「忍っ！お帰り！」シオンが頭に抱きついてきた。

む、胸が直に・・・。

この感触を味わっていたいが・・・。

「ギブ、ギブ！苦しいっ！」僕は悲鳴を上げた。

「あっ、ごめん。」シオンは飛び退く。

僕は大きく肩で息をすると、そばの段ボールを開けてみる。

誰もいない。

クローゼット、押入、台所、と同じように探していくが誰もいない。

最後にトイレを開けてみると・・・。

「あ。」「フフフフ。」

剛がいた。

「また変なこと吹聴したな。」僕がため息をついてボタンと扉を閉める。

そして箆笥を移動させて扉の前に置く。

「忍。ごめんよ。ってあれ？開かない。」

ガチャガチャガチャ。ドンドンドン。

「おい！悪かった！開けてくれ！おい！おい！」

さて、剛をほつぱり出した後、あり合わせで野菜炒めを作った。

彼女、大体分かるかも知れないが、料理が苦手である。

野戦料理はできるらしいが、普通の料理はめっぽう苦手である。

と言う訳で学校から帰った後、すぐに僕が夕食を作っているのだ。

・・・牧人にはかなわないが。

彼女も一応、ご飯は食べられる。剣なのに。

と言う訳で、僕らは向かい合ってご飯を食べ始めた。

「忍のご飯、やっぱり美味しいね。」シオンが野菜炒めを頬張りながら言う。

「うんにや、そんなことないよ。」僕は頭を掻きながら呟いた。

どうも、シオンに褒められると照れてしまう。

「牧人の方がうまいし・・・。」と言うと、

「バカね。あなたの料理の方が愛情たっぷり。こっちの方が何百倍も美味しいわ。」

シオンは桜の花のように微笑んだ。

僕は一瞬、ドキドキしてしまった。

・・・時々、こういう不意打ちもあるからな・・・。

僕は飯を平らげ、シオンの食器と共に洗った。

そして、冷蔵庫からオレンジの缶ジュースを取り出し、一気におおる。

ちなみに缶はスチール缶が好きだ。

「おつ、そうだ。」僕はあることを思い出した。

僕は学校のカバンから十数冊の本を取り出した。

「これこれ。」僕はそれをソファに座っているシオンに手渡す。

北方謙三版の三国志である。

「えっ？これ、どうしたの？」彼女が驚いて尋ねてきた。

「友達の祐ちゃんから借りた。」僕がソファーに座りながら答える
と、

「・・・そう。」と不機嫌そうに言った。

「・・・もしかして、妬いてるの？」僕が問うと

「ばっ、バカッ、そんな・・・。」と彼女は言いかけたが

「ハイハイ、分かった。そんなに僕のが好きなのか。」と敢えて僕は遮った。

「なっ・・・。」と反論しかけた彼女の唇を僕の唇で素早く塞ぐ。

彼女の舌が僕の口の中に入り僕の舌と絡み合っていく。

濃密な時間が過ぎていく。

やがて、潤んだ彼女の瞳が挑発するようにこっちを見てきた。

ふうん・・・。

僕は彼女の肩を押し倒した。

ソファーで折り重なって横になる。

自分は実際、交尾はしたことはない。

朱雀邸で抱き合ったことはあったが、その時はただ抱き合っていた
だけだ。

まあ、本能に任せれば何とかなるだろう。

彼女の服を脱がしていく。同時に器用に自分の服も脱ぐ。

しかし、裸にして初めて分かったけれど、かなり魅惑的な身体をしている。

彼女の存在を確かめるように愛撫していく。

客観的に考えてみるとこれは愛とも取れるし醜態とも取れると気が
付いた。

そう考えるとどうも躊躇してしまう。

そんな意図を感じ取ったとか彼女は耳元で囁いてきた。

「私と一体になるのがそんなに汚らわしいことなの？」

頭の中で稲妻が走る。

そして、悟る。ああ、これは美なのだと。

彼女の体の中に自分の体を沈めていく。

快感という名の閃光が生まれる。

閃光が自分と彼女の間で巡り会っているようだ。

そしてそれは突然終幕を迎えた。

僕は微笑んだ。

やがて、意識が闇に吸い込まれていく・・・。

僕らの新婚生活（後書き）

ハヤブサです。

ちよつと書き方を変えさせて頂きました。
これからよろしく。

板橋に行こう。(前書き)

『僕の恋人は妹』と平行しています。

板橋に行こう。

「ふああああ。」あつ、僕、寝ちゃったのか。

シオンが僕の身体に抱きついてスヤスヤと寝ている。

おお、寒ッ！僕は身震いした。

それもそのはず今の季節は秋。シオンの身体は剣なので冷たい。

僕は服を着た後、キッチンと彼女にも服を着せてやる。

そして自分の部屋から毛布を持って彼女の身体に掛けた。

これで、風邪は引かないだろう。

僕はインスタントラーメンにお湯を入れ、その間に学校の準備を大急ぎでした。

ちょうど3分。僕はラーメンをなるべく音を立てないように啜って食べた。

あつ、やば、始業時間まで10分もねえ。

僕は乱雑にメモを書くと、僕はカバンを持ってベランダから外に飛び立った。

「風陣、《疾風飛行》！」

そして無事、学校の屋上に到着！

僕は急いで階段を駆け降りた。

早くしないと授業が始まってしまう。

放課後、バッグの中に学用品を仕舞っていると、思いっきりノートで指を切ってしまった。

「ああ、忍、ちよつといいか？」真次だ。

「あ、ああ、構わんが。」よくはないけどね。

あ、そういえば、傷の治療方法を教わっていなかった。

大喬さんに聞いておかないと。

僕らは遺跡研究部の部室に行った。ここなら盗聴の恐れもない。

「で？何？」僕はソファ―に腰をおろして尋ねる。

「ああ、実は・・・。」

グダグダ、ダラダラ、クドクド。

十分間くらい話している。

「ばっさり言っちゃうと、自分は彼女の性欲発散道具と思ってしま
う。・・・ってこと？」

彼の話の遮って僕が言っていると彼はこっくりと頷いた。

「と、言う訳なんだ。」

「ふむ、なるほどね。」僕はしばし考えた。

「まあ、その辺は自分で何とかしてみ。何とかならないならもう一
度僕に言いな。」

これが、僕が言える最善の言葉だ。

真次はコックリと頷いた。

「ありがとう、忍。」

コンコンとノックがされた。

「ハ―イ。」真が返事をする。

みんないろいろな返事をして入ってくる。

確か、今日は剛も来るはずだ。

やつこさん、誰かに惚れてもうたらしい。

まあ、誰だかは目星がついているが・・・。

大和先生が剛の紹介と説明をクドクドしている。

「・・・でレポートを書く。OK？」失礼、クドクドではなかった。
みんなは思い思いに返事をし、解散していった。

しかし僕はまだやることがある・・・。

第3臨時職員室・・・。地味・・・。

83%、誰も来ないと秀才君の牧人が言うくらいである。

僕はその戸をノックした。

「入れ。」低い声。

僕が中に入ると、中野先生と阿部がいた。

「ああ、座ってくれ。」

僕は適当な椅子に座る。

・・・何とも殺風景な部屋だ。窓はなく、生徒用の椅子が数個あり、机は3台しかない。

壁紙はないが、それ以前に、時計やカレンダーがない。

「麒麟から緊急？の要請がかかった。そんな大変なことではないらしいが。」

先生はそう前置きすると、何処からともなく銅鏡を取り出した。

それを地面に置いた。

覗き込んでみると、『大麒麟帝国宝鏡』と書かれている。

・・・実際の歴史にはない物らしい。

と、突然、鏡の上の大気が歪み始めた。

空気が着色しつつ、形を作っていくのを僕らは驚愕の目で終始見つめた。

そして、麒麟の顔が浮かび上がった。今日はライオンのような顔をしている。

「これは、青龍殿に朱雀殿。ご機嫌麗しく。」わざとらしい挨拶だ。

「今回はどうも異例の事態だね。シオンちゃんや聖人君のような現象が起こっているんだ。」

「と言いますと？」阿部が促す。

「剣が人間になる・・・というね。まだ5件程度らしいが・・・。」
「そこまで言つと麒麟の顔が一瞬消えた。そしてまた現れる。」

「失敬。もう1件確認された。全部で6件。まだ危害を加えるような存在ではないし、見方次第では仲間に出来るから、部下を数人配備するだけにしてある。・・・君達の耳に入れておくべきかと思つたからね。」

麒麟は間を開けて最後の台詞を紡いだ。

「了解しました。」「御意。」僕と阿部は返事をした。

「くれぐれも！ちよつかいを出さないように！」

「わわわわわかりましたって！」頼むから化け物の顔を凄ませな

いでくれ！

「よろしい。では中野君、二人の補佐を頼んだぞ。」

「承知。」先生は短く返事をした。

「では。」そう言うのと麒麟の顔は消え、大気は元の色に戻った。後に残ったのは少々の煙だった。

僕らは後始末をして立ち去った。

しかしまあ、はっきり言つてすぐに彼らに出くわすとは思つてもいなかった。

次の日、僕は家を出て板橋に向かった。

シオンはどうも近藤勇に興味を持ったようで、剣になって僕の荷物の中に入った。

と言うよりは近くの三國志展に行きたいらしい。

僕は駅まで行き埼京線に乗り込んだ。

しかし、剣は重たい……。

ふと、列車の中に視線を走らせると、祐ちゃんを見つけた。

……あれ？真は？

何かあったようだ。

板橋駅だ。東京なのに田舎っぽい。

シオンを人間化させると彼女ははしゃいで行つた。

まあ、魔連絡機（電波の代わりに魔法を用いる携帯電話）も持たせたから大丈夫だろう。

立花さんが祐ちゃんと話している。

立花さんは何か二言三言言つたようだ。そして頷いた。

「何があつたつて？」

僕は立花さんに近づいて単刀直入に尋ねた。

「えつとですね……。」2分ばかり説明タイム。

「なるほど、性欲で我を失つたか……。そう来たなら仕方がない。」

「僕は独り言を言う。」

「へっ？」立花さんは半信半疑である。当たり前だが、

「立花さん、協力願えるか？ただ、彼女を縁切櫃に連れて行けばいいだけだ。」僕は頼んだ。

「えっ？あ、ああ、はい！あれ？なんて言いましたか？今」彼女は変な方向を見ていた。

・・・剛の方向だ。ほほう、まさかね・・・。

「祐ちゃんを縁切櫃に連れて行けばいい。頼めますかな？」

「はい、分かりました。」よし、後輩というのは便利だ。

僕は板橋駅改札の外でまだかまだかとじりじりしながら真を待った。やがて、暗い影を背負ったうつむき加減の少年が歩いてきた。

「ふっ、思い切った物じゃない。」僕は出会うなり開口一番に言った。

彼はのろのろと顔を上げ、3秒ほど固まった後言った。

「祐から・・・聞いたか？」・・・おい、鈍いぞ。

「立花さんから間接的に。とりあえず、」僕はそこまで言うと1秒間考えた。

「何とか手伝おう。うまい方向に行く。」そう僕が続けると彼は瞳にわずかな輝きを持った。

「ほう？なるほど。任せてみようかな。」悪戯っぽい試すような視線。

「よし、わかった。」自信満々に答えた。

僕は近藤勇の記念碑の当たりで術をかけた。

誘導呪文・・・幻術を少々だ。

ああ、こちら辺の仔細は真次視点で見た方が面白いから、書かないぞ。

都合のいいときに彼は目眩を起こした物だ。

しかし、彼の身体の力の流れが変わったような気がする・・・。

まさか・・・ね。

その後、彼らは無事仲直りをしたようだ。

僕はそれを傍観していた。

そして、僕は大和先生に連絡した。

「彼らのために、ちよいと良い場を設けたいが？」

「ああ、カラオケを手配しよう。」先生は万事悟ったように言った。
僕は微笑んでその場を立ち去った。

あ、勿論、決め台詞も忘れずに。

新剣現る。

そのカラオケで剛が告白して、まあ、ゴタゴタあったことは真の方がうまく説明してくれるだろう。

それより・・・。

僕はカラオケを出て剛と立花さんが談笑中なのをちらりと見た。
あのバカが……。

僕がどうしようかと試行錯誤していると、

「じゃあね。」
「じゃあな、忍。」
「おう。」

真と祐ちゃんが帰っていった。

それをきっかけに剛と立花さんは別れていった。

「おい！剛！」
僕が大声で呼ぶと、

「あ？」と間抜けな声を出して近づいてきた。

「お前、自分が吸血鬼ってことを覚えているか？」

ヴァンパイアは口をポカンと開けた。

数秒後、顔から血が引いていくのが分かった。

「どろどろどろしように!?」まさに、パニック。顔が真っ青だぜ。剛。

「んったくよお。」僕は呟くと札を取り出した。

『欲抑制札』と書いてある。

「あらかじめ作っておいた奴。これなら彼女を嘔む心配もない。しつかり、皮膚に貼っておけ。ただ、油断はするなよ。いいな、絶対だぞ。」

僕はしっかり念を押しすぎるぐらい念を押しした。

「わ、わかった。」彼は少々安堵したようにその札を持った。

彼がこの世界に舞い戻る時点で中野先生が何重にも『欲抑止呪文』という

少々、危険な術を用いたにもかかわらず、彼はもうすでに三人噛みそうになっていた。

「安心するな。危機は安全の後ろにいる。」僕はどこかの偉人のような台詞を言った。

「うん。」彼は神妙に頷いて立ち去った。

数分後、シオンが戻ってきた。

僕は牧人と共に待っていた。

「おう、シオン、三國志展は楽しかったか。」

「うん。」彼女は俯き加減に言った。

・・・？様子が変だ。まあ、いい。

「んじゃ、帰るぞ。」僕は歩き始めようとしたとき、

「待って!!」

鋭い声。

シオンでも牧人でもない。

若い女性が背後に立っていた。

「青龍さんかしら？」彼女は開口一番に言った。

背中に悪寒が走る。なんで、知っているのか？

「そうだと言ったら？」僕は下手に出たが、

「ふむ・・・。ハンサムなこと。顔はイマイチね。」彼女はそのままぶつぶつ言っている。

・・・？

「誰？」シオンが邪険な顔で尋ねる。

「あなたがファルシオン・・・。可愛いじゃない。」

質問には一切切答えない。

困ったな・・・。

「いきなりで悪いけど、貴方、死んで貰うわ!」

彼女はそう言ってシオンを指さした。

「はあ？ちよつと待つ・・・。」「問答無用!」

彼女が飛びかかって来たのを僕らは飛び上がってかわした。

「手裏剣！」女性は何か投げってきた。

そのまんま手裏剣である。シオンに向けて。

「チッ！」やむを得ない。彼女の手首を捻った。

彼女は剣に変わる。

手裏剣は脇を通っていった。

「真希人！場所を！」僕は叫んだ。ここじゃ、人が多くてやりにくい。

「土陣、《地盤隆起》！幻術《場面転換》！」彼は鋭く叫んだ。

途端に時空が歪み、小さな空間が生まれた。

彼女が飛びかかってくる。

「青龍覇！」僕は術を叫びながら飛び退いた。

彼女は動じない。

沈黙の剣

「体術、《サイレント・ソード》！」彼女の手の甲から刃が出た。

僕は地面に足をしっかりとつき、上段に構えた。タイミングを見計らって振り下ろす。

刃と刃が触れ合い、擦れる。

同じような応酬を長く繰り返す。

彼女の剣が丈夫だと言うことに僕は気づいた。魔法の剣なのだ。きつと。

僕は思いっきりシオンを振り上げた。

が、彼女の体はない。

（忍！下！）シオンが叫んだ。

そう、すでに僕の身体の下に潜り込んでいたのだ。

まずい、胴を斬られる・・・。

が、彼女は斬らずに右腕に回し蹴りを放ってきた。
激痛が走る。

僕は咄嗟に飛び退きながら左手にシオンを持ち替えた。

まずいな。右腕が使い物にならない。でも、何で僕を斬ってこなかったのか？

（ねえ、あの人、魔法使いみたいだけど・・・何か異質よ。）シオ

ンが囁いてきた。

・・・確かにおかしい。力が尽きる気配がない。

狙いはシオンだけ。尚かつ僕らのことを知っている。

何故か回し蹴りが強い・・・あれ？これなんか・・・。

頭の中に電流が走った。

仮説は立った。

後はそれを試すだけ。

（協力、してくれるか。）僕は頭の中で囁いた。

（・・・やってみる。）頭の中の計画を読み取ったシオンは重々しく言った。

（絶対、助けるから。）（信じてる。）

僕は覚悟を決め、シオンを彼女の方に思いっきり投げた。

彼女は微笑んで剣を上に向けた。

ガシッ！

僕は超人の速度で彼女の手首を押さえていた。

彼女の表情が変わっていくのを見ながらゆっくりと手首を回す。

まばゆい閃光を放って僕の手の中で剣に変わっていった。

「やっぱりね。」僕はため息をついた。

ゆっくりと舞って落ちてきたシオンを優しく受け止めた。

騒がしい暮らし

僕らは自宅に戻った。

テーブルのど真ん中に剣となった彼女を横たえた。そしてシオンを実体化させる。

彼女は安心したのか崩れ倒れそうになった。

僕は咄嗟に支えてやる。

「怖かった……。」「彼女は僕に抱きついた。

僕は彼女の頭を撫でながら抱きしめてやる。

しばらくそうしていた後、僕は身を引いて剣の方に向き合った。

「さてと、牧人君？頼むよ。」僕はしばらく存在感を消していた彼を振り返った。

「出来るか、分からないけどね。」

彼は真っ青な顔をして言った。

彼女の柄頭を捻る。人間化した。

即座にロープで手足を拘束した。

「さて、誰の差し金かな？邪神か？」牧人が彼女の頭を押さえながら尋ねる。

「違うわよ。」即答。

「じゃあ、誰？」「自分の意思で。」

「何のために。」「シオンって子を殺すために。」

「何で？」「相棒は二人も必要ないわ。だから。」

おいおいおい。

「待てや。もしかして、僕の武器になろうとしたとか？」僕が呆れつつ聞いた。

「ええ、そうよ。だって、前の主人、死んじゃったから。」

「……。」

僕らは押し黙った。

牧人が彼女の頭から手を離した。

「真実みたいだよ。」相変わらず真つ青な顔をしている。

彼が使ったのは『内脳読術』という高度な術で慣れていないと余計な物も見えてしまう。

前回、牧人が使ったとき、偶然グロテスクなシーンを見てしまった以来、あまり使っていないとか……。牧人、お疲れ様。

「ねえ、どちらにしろ、私には宿がないの。手持ちのお金ももうないし。しばらくの間、泊めてくれない？新しい主人が見つかるまで」彼女は懇願してきた。

僕は悩んだ。別に泊めても構わないし、剣は全般的に好きだから良いのだが、

シオンがいるし、結婚している以上には他の女を住まわす訳にはいかない。

「別に良いわよ。」シオンが唐突に言った。

「えっ!？」僕は驚いて振り向いた。

「その気持ち、分かるもの。」シオンは頷いた。

「えーと、じゃ、決定で。」僕はおずおずとそう言った。

その日から家がうるさくなった。

僕が戦闘中に使ったシオンの刀身に油を塗って、磨いたりしている
と、

「ねえ、私も磨いてくれない？」と彼女は言ってきた。

僕が何か言うより早く、彼女は手首を捻って剣になつて転がった。

「んったく、仕方がないな。」

僕は手ぬぐいでシオンを念入りに仕上げると実体化させた。

そして彼女を手取る。思わず顔をしかめた。

細かい傷がたくさんある。

僕は『傷取りハイパー!』という缶を取った。

その中の粉をかけて手ぬぐいで拭いていく。

この粉は魔法で構成され、水を含むと周りの粒子と同じ物質に化け

てくつつくらしい。

傷の中に粉を埋め込んでいき、余計な粉は丁寧に取り払っていく。と、後ろでシオンが邪険そうに僕を見ていることに気が付いた。

「ん？」僕が振り向くと、

「ヤケに丁寧にやっているじゃない。」と不機嫌そうに言った。ふうん、こいつ、妬いているのか。

「後で、やり直してやるからよ。」僕はそう言った。

紙ヤスリをかけて新品同様ピカピカにして、実体化させる。

そして、シオンをもう一度剣にして磨き始めた。

（もうちょっと、丁寧にやりなさいよ。）とやたらうるさい。

しまいには上等の亜麻仁油を使う羽目になった。もったいない。

僕がタオルで（手ぬぐいではない。）しっかり拭くとシオンも上機嫌になった。

「なんて言うか。わがままな子ね。」後ろから眺めていた彼女が呟いた。

「わがままじゃない！」「わがままじゃないの。」

ギャーギャー叫び声が飛び交い始めた。

うるせえ。

口論が長く続きそうだったので、外で散歩することにした。

数分、町を歩いていると『稲田屋』という喫茶店が目に入った。

面白そうだ。ブラッ&喫茶店に入る。

「いらっしやい。」低い声が店内に響いた。

黒い服を着た人がカウンターのの中にいる。この人がこの店のマスターで稲田さんだろう。

「やあ、忍君。」ん？

僕が振り向くと知らない男が席に座っていた。

彼は不気味に笑って言葉を続ける。

「邪神の使いだね。青龍の命を頂戴しろとね。」

背骨が冷えていくような感触。

「だ、だって、嫁がいるんですよ！！僕には！」僕は慌ててそうまくし立てた。

「戯れだよ。しかし、ふむ・・・了解した。」
僕らはふうと息をついた。

「さあ、ここの店の鰯定食は旨いぞ。食べていくか？魔法定食もあるぞ。」

「・・・遠慮します。」

「ただいま。と、えっ！？」

部屋が戦場と化していた。

「幻術、《サイレント・ソード》！」「風陣、《大気剣》！」
刀の音が部屋の中で響き渡る。

僕は慌てて外に出て、隣の部屋の戸を叩いた。

「牧人！牧人！」「ああん？」

牧人と小喬さんが出てきた。

「ちよつと今、部屋が大変なの！助けて！」

僕が嘆願すると牧人は剣を抜いて僕の部屋の中に入っていた。

「おい、止めれ！」牧人の声。

「邪魔しないで！」

「ぬおっ！ふごっ！ぐはっ！ぎゅえ！」

4回の打撃音と悲鳴の後、牧人は出てきた。

死んでいる・・・訳ないが。

しかし、かなりの重傷である。

小喬さんはやれやれと首を振って部屋の中に入った。

「体術、《闘心連覇》！」小喬さんの声。
・・・止まった。

恐る恐る中に覗いてみると、中には2本の剣が転がっていた。

「部屋主さん。ちゃんとしなきゃダメよ。」

小喬さんはため息をついた。

「二人共！反省しなさい！！」小喬さんの怒声。

部屋の中で正座させられている二人の女性。

「どれだけ迷惑かけたと思っているの！？ほとんどこの部屋は原形をとどめていないし。牧人さんも肋骨三本行っちゃったのよ。しかも、こういう時に限って、敵襲が来たらどうするのよ。他の人たちの迷惑も顧みてちょうだい。全く。」

小喬さんは声を荒げて怒鳴った。もう30分が経過していた。

「忍君も言ってあげなさい！」ううむ、そんな顔しなくてもいいんじゃない。

「正直言つて、ちよいがっかりしたな。シオンも僕の妻で彼女のお姉さん格に当たるんだから、しっかりしなきゃダメでしょう。」

僕は『僕の妻』という所に力を込めて言った。

彼女は頭を垂れた。

二つの恋の行方（前書き）

レバーと剛の話です。

二つの恋の行方

【レバー】

忍達が板橋に行っている頃・・・。

彼女が好きなマスクメロンをぶら下げて俺は歩いていた。
彼女？勿論、明美のことさ。

シスコンだろが何だろうがシラねえが、俺様には関係ねえ。
ん？ありや、明美か？

建物の間から明美が現れた。なにやら挙動不審である。
？おかしい。尾行してみるか。

彼女はある家に入っていた。
表札を見ると『藤』と書かれている。
冷や汗を感じる。

ば、馬鹿なそんな、は、はずは・・・。
いやな予想は膨らんでいく。

俺は魔耳（魔法世界の盗聴器）を取り出し、超小型ラジコンにつけた。

このラジコンは超小さい。1cmほどでしかない。
しかも臭いの追尾機能もある。

あらかじめ、明美の臭いをつけてあるので大丈夫だ。

僕は電源を入れてそいつを放った。耳にイヤホンを付ける。
徐々に音が入ってくる。

『やあ、・・・ザザザ・・・こんにち・・・ザザ・・・あら、明
美ちゃん、今日も・・・ザザザザ　ザ・・・』

何だ？今日もという台詞が気になる。だんだんノイズが消えていく。
『まさか、つけられてないだろうね・・・ザザザザ・・・ら、大丈

夫よ。・・・お兄さんとかに見つか　ったら・・・ザザザ・・・ね、でも、秀作さんと一緒になれるなら大丈夫よ。』

そんな馬鹿な・・・。あり得ない。

俺は否定しようと耳の中に深くイヤホンを突っ込んだ。

・・・後悔した。

『ああ・・・うつ・・・むあ・・・ザザ・・・ふあ・・・。』

二種類の甘い声が混ざり合う。

間違えようのない事実だった。

手の力が抜け、マスクメロンが地に落ちた。

地に墜ちた、愛。

俺は公園の中でがっかりしていた。

あの後、僕はその場から思わず立ち去ったのだ。

かなり、シヨツクだった。

クソッ！何で明美を俺の物に出来ないんだ！何故だ！

（それは、邪魔者がいるからだ。）何処からともなく声が響いてきた。

（邪魔は取り払えばいい。利用するのだ。全てを。）

冷たくないが温かくもない。甘えもない声が妙に好感を覚えた。

「どうすれば良いんだ。」俺は声に出して問うた。

（答えは見えているはずだ。もう一度、考えてみる。）

俺は考えた。全ての明美にすり寄ってくる虫けら共を潰すにはどうしたらよいのか。

明美の周り・・・四神連合軍？潰す？

「邪神か！」

【剛】

忍が剣を磨いてくる頃。

僕は部屋にいた。自宅の。

昨日の余韻に浸っていたのだ。

「ムフフフフ。」

独り笑いしながらあるCDケースを取る。

『Stay with me』良い歌だ。

ちなみに、これは一度、忍とカラオケで聞いたときに欲しくなった曲だ。

自腹購入した。

「剛！お客さんよ。」お母さんの声が下からした。

「ハ～イ！」僕が降りていくと・・・。

「こんにちは！」

立花 理恵。その人が立っていた。

「ち、散らかっているけど、どうぞ。」僕は自室に通した。

彼女はクスクスと笑った。

「本当に散らかっているわね。」

その微笑みを見ると僕はホッとするのだ。

初めて彼女に会ったのは、部活見学の時か。

僕は剣道部に所属していた。

彼女が隣のチア部を見学していた。

チラと見たときの彼女の微笑みを偶然見たとき、好感を覚えたのだ。
った。

・・・確かその時、祐ちゃんもいたはず・・・。
だからなのかな。

4日前のこと、祐ちゃんが話しかけてきたのだ。

「あのね、立花 理恵って子知っている？」

僕は率直に「シラね。」と答えた。

「この子だけど・・・やっぱりね。」

写真を出した祐ちゃんは僕の表情を見て悟った。

「この子ね、遺跡研究部って言う所に入っているのよ。・・・もう分かるわよね。」

僕はカクカクと首を縦に振った。

全く、祐ちゃんというのはたいした子だと思う。

もしかしたら、牧人に匹敵するほどの策士かも知れない。

「ゴメンね。急に押しかけちゃって。」立花さんがモジモジという。

「立花さんだったらいつでも良いよ。」僕は出来るだけ朗らかに答えた。

「理恵って呼んでよね。剛君？」・・・意外と大胆な子なんだな。

僕らは数分間、談笑した。

「へえ、忍君ってそんな趣味していたんだ！剣フェチね。」

理恵はクスクスと笑い続けている。

「だから今、彼は剣と一緒に暮らしているんだ！」

「えっ？」あつ、しまった。

「あ、ああ、だから、鶴木さんっていう剣フェチの人！」大慌てでまくし立てると、

「ああ、なるほどね。」理恵はすんなり納得してくれたようだ。と、突然、ズシンという揺れが起きた。

地震のようだ。

麒麟の建てたマンションは超耐震で揺れを通さないらしいが、ここは普通の家だ。

グラグラグラ。

「きゃっ！」理恵が謀ったかのように抱きついてきた。

まあ、それはそれでよい。

ここはドラマでよくある筋書きに従おう。

理恵と目があつた。

無意識のうちに顔が近づいていき・・・。

唇が合わさっていた。

僕は何処かの小説に書いてあったように軽く彼女の下唇を噛む。(

勿論牙は使わない。」

彼女の口が開いた所に僕の舌を滑り込ませ、彼女の舌と絡め合わせる。

彼女の喉の奥から甘えるような声が出てきた。

脳みそがてっぺんから抜かれるような妙な快感。

僕は思わず彼女を押し倒して抱きすくめた。

しばらくそう抱き合っていると彼女の首筋に目が付いた。

ドクン。妙な衝動が走る。

ドクドクン。人間ではあり得ない欲が性欲と共に溢れ出てきた。

噛みたい。血を吸いたい。そして彼女を我が一族に加えたい。

そして僕は・・・負けた。

牙を優しく彼女の首筋に沈める。

彼女はビクンとしただけで抵抗はしない。

思いつきり血を吸い上げていく。

何人もの理恵に囲まれているような最高の快感を味わう。

しかし、ここで躊躇した。

このまま、吸い続けて良いのか。まだ全身にヴァンパイアの血は流れていない。

応急処置をすれば、まだ無事なはずだ。

「いいのよ。私がヴァンパイアになっても。」彼女は耳元で囁いてきた。

「な、何で知っているの？」僕が戸惑うと、

「麒麟って言う人から聞いた。冗談だと思ったけど本当だったのね。」

「と彼女は言った。」

もはや、躊躇する必要はない。

牙を突き立て血飛沫を立てながら派手に血を吸う。

彼女ももつすでに生えてきたらしい牙で僕の首筋を刺した。

お互いの身体に快感とヴァンパイアの血液が流れていく。

僕の部屋のカーペットや散らかっていた本は血に染まっていた。

【?????】

ロサンゼルスのとあるバー。

私はウォッカを呷った。

「へい！飲み過ぎだぜ。お嬢ちゃん！（和訳済み）」マスターが心配そうに言った。

「大丈夫よ。」私は笑顔を見せた。だって邪神の娘だもの。

私は戦乱の途中に改心し、母を説得しようと試みたが追放された。私は僅かの部下を連れて逃亡したが、白虎の軍に殲滅。

最愛の人、ジャックも失い、それでも逃げていた所をアルに助けられた。

事情を話すと彼は粗末ながらもロスに家をくれたのだった。

コトツと音がした。

前にバーボンが置かれている。

「あら、私は注文してないわよ。」と言うと、

「そこのお客さんからだよ。」とマスターは答えた。

日系の気の強そうな男性がこつちを見ていた。

「日本語、喋れるんだろ。（日本語）」彼は喋ってきた。

「あなた、誰？」私は不審に思った。

「あんたと同じ能力者だ。」彼は酒を呷った。

私はそれでも不審に思えたので防犯魔法がしっかり張り巡らされた我が家に招待した。

彼は携帯酒瓶を取り出してグイグイまだ飲んでいる。そして語り始めた。

彼が話すに四神の側にいたがゴタゴタした出来事で抜け出したという。

名前は高田正樹・・・八尾の兄らしい。

「あんたの名前は聞いていなかったな。といつても邪神の娘か。」
彼は言う。

私は悪寒を感じた。こいつ、何でこんなに知っているの？
でも、そう言う無礼な所に好感を覚えた。

「私は邪神 真弓。ここじゃあ、エリザベス・ブラウンって名乗っているわ。」

私は恐る恐る答えると彼はニコツと微笑んだ。

「母親思いなんだな。」

「っ！あんな母親なんて！」私は憤慨しかけたが、

「邪神って言う名字をしつかり答えるってことはそう言うことだよ。」

彼はいけしゃあしゃあと答えた。

「なあ、母親を救いたくないか？まだ、軌道は直せれると思うが。」

彼は優しくそう言った。その口調が限りなくジャックに似ていた。

私は思わずコックリと頷いた。

超壮絶！？夫婦喧嘩！

【シオン】

グビグビグビ。ドン！

「いやあ、姉ちゃん。よく肝臓が持つなあ。何杯目だ？」また男が絡んできた。

「32杯目。ちなみに絡んできた男はあんたで24人目よ。とつと消えてちょうだい。」

呂律の回らない舌で何とか私はそう言い放つと男は残念そうに退いた。

コトツと水のグラスが置かれた。

「んつたく、忍が心配しているぞ。」あつ、レバー。

「いいのよ。あんな主人なんて。」グイツと水を啣る。

「何で？」コトツ、

「あのバカ主人ったら浮気しているんだもん。」グイツ、

「じゃあ、シオンちゃんも浮気しちゃえば？」コトツ、

「そんなことする気力がない。」グイツ、

「・・・分かるよ。その気持ち。」レバーもバーボンを飲み始めていた。

もしかしたら、明美ちゃんの浮気がばれたのかも知れない。グイツ。

「何か、彼に私だけを愛して貰いたいのに・・・。」

「んじゃ、懲らしめちゃえば？」レバーはふざけ半分事で言った。

「いいわね。」

後から後悔しても無駄だが、今回、何か錯乱していたんだと思う。そしたらこんなことにはならなかった・・・。

【忍】

帰ってこないな……。シオン。

「大丈夫ですよ。彼女は。」居候している剣が言う。

「だといいいけどな……。」僕はため息をついた。

「シオンさんのこと、余程大事に思っているんですね。」

「ああ、僕の妻にて相棒だからね。」少し照れて僕は頬を掻いた。
ボタン、と戸の音がした。

「シオン！」僕が出て行くと……、

「風陣、《大気剣》！」

「ぬおっ！」腕を切られた。

シオンはシオンなのだが目が狂気に走っている。

「話せば分かる！」と犬養毅ばりに説得しようとしたが

「問答無用！」と斬りかかってくる。

ちつ……。誰かに錯乱の呪文でも掛けられたな。

「忍さん！」剣である客人は自ら剣になった。

しばしためらったが彼女を取って上段に構えた。

今、考えてみると、彼女は忍び刀であった。

室内にむいた剣である。

つまりいつもの通り、力強く斬り下げ物質をまっぶたつにしようとする戦法はいかに愚かかこの日に思い知らされた。

そう、弾き飛ばされた。

僕は無様な姿で倒され、剣は吹き飛んだ。

そしてその剣は僕の身体に突き刺さった。

「ぐはっ！くおおっ！」僕の肺に突き刺さったのを感じた。

……。しかし、おかしい。あんなに軌道が変わると……。

「ゲホッ！ゲホッ！」血を吹き出した。

僕は剣をゆっくりと抜いて止血をする。

……。ダメだ。止まらない。

剣の柄頭を捻った。

女性が閃光を放って立ち上がる。

「あなたっ！主人に向かって何てことをっ！！」彼女が憤慨したが
「止せ。今は・・・ぐっ・・・それどころではない。」僕は喘ぎ喘
ぎ呻いた。

「シオン、済まなかった。自業自得だと自分でも分かって、ぐおっ
！」

またもや、吐血する。しかし僕は言葉を紡いだ。

「この惨劇には黒幕がいるはずだ。探してくれ。あと、客人よ。」

僕は手を血に染めながら言い続ける。

「新主人はすぐ来る。」

僕はそこまで言う意識が朦朧としてきた。

まずい。これだけはやっておきたい。

僕は血で必死に魔法陣を書き始めた。

書き終えるともう指一本動かす力もなかった。

「あの世で反省してくる。」僕は消え入りそんな声で言う術を唱
えた。

「神術・・・《屍子炎帝陣》！」

光 忍、18歳、短い生涯だった。

勿論、麒麟様が生き返らせてくれるだろうがしばらくあの世で反省
していよう・・・。

【小喬】

うにゃ、うにゃ、何か音がする。

ドンドンドン。「大喬さん！大喬さん！」

私は慌てて起きあがりドアを開けた。

「どうしたの!?」シオンちゃんが泣きながら血まみれでいた。

「大喬さんを！忍がっ！」シオンちゃんのかみついてきそうな勢い
で叫んだ。

丁度良く姉さんが出てきた。「んにゃ？何？」

「早く！」

私たちが忍さん達の部屋に行った。

忍さんが血まみれで倒れていた。

「忍さんっ！忍さんっ！」姉さんが脈を測った。

「・・・死んでる。」姉さんの唇からその言葉が漏れた。

「嘘だろ・・・。」おい、忍。「ついてきていた牧人さんは力無く笑っていた。

「おい、起きろよ。なあ、忍ったら。」彼は忍さんの身体を揺さぶるが、当然反応はない。

彼は力無くその行動をし続けていた。

ピーンポーン、場違いなチャイムが流れた。

「はい。」シオンちゃんは萎れながらそう言っただけを開けると、

「おう、忍君はいるかな？」男・・・麒麟様が立っていた。

「麒麟様、お助け下さい！」シオンちゃんが哀願した。

「はあ？事情が読めないが・・・。」

彼はそう言いながら室内に颯爽と入ってきた。

そして、忍さんを見るなり、屈み込んで治療を始めた。

「大喬のお嬢さん、手伝ってくれるかな。」彼は癒しの光を放ちながら言った。

「は、はい。」姉さんが同じく屈んで治療を始めた。

緊迫した数分間が続く。

そして、麒麟様はオレンジ色の物体、通称：AEDを取り出した。

「離れて。」彼は低く呟きながら、電極をテキパキと貼り付けた。

ボタンを押すと起動音と共に電気ショックが起きた。

「ちなみにこれ、本当はAEDじゃなくてMAEDなんだ。

Magic Automated External Defibrillatorの略。魔法で超強力な電流で心臓を動かす機械。

麒麟様は電極を片づけながら言った。

「彼はもう生き返っているよ。まあ、仕上げにかからなきゃいけない

いけど。」

彼はそう言いながらベランダに出た。

いつしかのように彼は雲を引き寄せた。

彼は雲の中に手を突っ込もうとしたが、止まった。

「話が弾んでいるようだ。ちょっと待ってやろっ。」

天界での・・・。

【忍】

ふむ、いつしかの天界だな。

向こうから誰かがコツコツと歩いてきた。

「おやおや、また来たのか。忍。」確か12代目か。

「おいで、21代目が待っている。」彼は奥に連れて行ってくれた。程なく奥に爺ちゃんがいた。将棋盤もある。

「やあ、孫よ。10年ぶりに将棋でも指そう。」爺ちゃんは十年前と変わらない声で言った。

「僕、結構強くなったよ。」苦笑しながら向かいに座った。

パチ、パチ、パチ、パチ、

「ほう、総矢倉か。いい構えだな。」爺ちゃんはパチと銀を動かしながら言う。

「爺ちゃんは昔と変わらずアナグマだね。」僕は角を移動させながら言った。

「お前、相手の様子を窺っていたら、迂闊にやられたって所じゃないのか？」

「・・・うん。」パチ、

「ふむ、まあ、分からなくはない。麒麟が生き返らせてくれるだろう。青龍になったってな。女神から聞いたぞ。わしあ、誇りに思う。」

パチ、

「・・・。」パツチ、

「そう言えば、火影は元気か？家の家系とは一風変わった奴だった。」パチ、

「元気だよ。ピチピチ・・・王手。」パチッ！

「詰めが甘いぞ。」パチッ！

「・・・。」パチ、

「王手角とり。」パチ、

「ハハハハ。飛車取つたり。」パチ、

「うぬ!?」パチッ!

「銀取った。」パチ、

「・・・なるほど、それがここまでの布石ってわけか。」パチッ!

「うん。王手。」パチッ、

「しかし、計画が崩れるとどうなるかな。」パチ、

ふむ、この一手で大分、状況が変わった。

下手に打てば全滅は免れない。

しかし・・・。

「それも計画の内。」僕はさっき取った飛車を置く。

「・・・。」パチ、

「王手、詰み。」

「やるようになったのお。忍。これで、あれを渡せる。父さん!」

霧の向こうから20代目が現れた。

「忍君、君にこれを。」20代目は丸い物を差し出した。

目玉である。

「これは、青龍眼といって風の力を見ることが出来るんだ。やろう

と思えば風も作れる。」

眼帯をしている20代目が穏やかに続けた。

「父さんは君の前代の青龍の使い手だ。そしてこれは罪でもある。」

爺ちゃんは言った。

「罪・・・。」

「そう、私はこれで何でもない普通の人を殺めてしまった。それ以

来、これを封印してきた。いいか? 使い方を誤るんじゃないぞ。・

・禁術によってな。」

そう言つと20代目はふつと指を振った。

目玉の表面が砕けて、蒼いサファイアの色が露わになった。

青龍眼は水のようになり、僕の瞳に浸透していった。

「ちなみに、個人的なことだが、そいつは代々の青龍の使い手の細

胞が浸透している。あまり粗末に使うなよ。」

20代目は言う上を顧みた。

「迎えが来たようだな。」

「しつかりな。シオンちゃんによろしく。」爺ちゃんはその大きな手で頭を撫でた。

ふつと身体が軽くなった。

ふつ、あの世で反省してくるつもりだったが、こんなに早く戻るとは……。

でも、十分反省したか。フッフフ。

「……のぶ！忍！」シ……オンか？

「うるさい……な。もう少し眠らせるよ。」僕は弱々しく呟いた。
「忍！」……眠れそうにない。

「……と言う訳だ。」僕は事情を話し終えた。

「夫婦喧嘩にしてはすごいな。」麒麟が呟いた。

「んったく、生き返らせるのも楽じゃないんだからな。おっと？まさか青龍眼か？」

麒麟は目ざとく気づいた。

「ええ。」僕は目に力を入れて、青龍眼を発動させた。

「うわ、すごいな。みんなの吐息まで見える。」僕は驚いた。

「おっ！じゃあ、僕と同じか。」牧人が黄色に輝く目を明らかにした。

「黄竜眼って言うの。地面の力が分かるぞ。」

「へー。」僕は思わず感心した。

「さてと、今回はそこのお嬢さんの主人を見つけることだったな。

おーい！」

麒麟は外に出て、誰かを呼んだ。

「はい。」入ってきたのは龍馬さんだった。

青龍の搜索軍（今や、護衛軍になったが）を総帥する者で、先代の青龍に側近として任命された人間だからただ者ではない。

彼と彼女の目が会ったとき、彼女の頬が上気した。

どうやら、お気に召したらしい。

彼女は手首を捻って剣になった。彼は落とさずに掴む。

と、途端に彼は微笑んだ。

「よろしく、と彼女は言っています。」

心の声が聞けると言うことは、彼女が本当に気に入ったということに違いない。

彼はそのまま、麒麟と一緒に立ち去った。

みんなが帰った後、僕は部屋で扇風機を回して青龍眼を使って遊んでいると、

「ごめんね。」ベッドで腹這いに寝ていた彼女は静かに言った。

「いや、こつちがお前の気持ちを考えていなかったのが悪かったんだよ。済まなかったな・・・シオン。」僕は青龍眼をしまいながら言った。

「・・・忍ってやっぱり優しいね。」彼女は上目遣いで言った。

「そうなのかもな。」僕ははぐらかすように言った。

僕は立ち上がって死に物狂いで描いた魔法陣を見た。

・・・どうしよう。

流星にこれを消すのは勿体ない。万が一に備えて残しておくかな。

僕はその上にカーペットを敷いた。

「もしかしたら、第三者が関わっていたんじゃないかな。」僕は言った。

「えっ？」

「あれ、絶対、おかしいだろ。剣の飛んだ軌道が若干変わったから。」

あの時の夫婦喧嘩？のことを言っていることに気づいたらしい。彼女は頷いた。

「なあ、普段はお前、ああいうことしないだろ？誰かにそそのかさ
れたか？」

「うゝん、酔ってたから覚えてないけど・・・。男に沢山絡まれて・
・何かレバーに会った気がする。」

「ああ、捜しに言ってくれていたからな。」

「うゝむ、考え違いかも知れない。」

「今日は寝るか。」僕は言った。

僕は彼女の脇に潜り込んだ。

彼女の体を抱きしめつつそっと呟いた。

「おやすみ。」

大災害直前

僕らはもしかしたら気づいていたのかも知れない。危機という黒雲が早々に現れつつあることを。

それに気づいたのがたったの3日前だなんて・・・。

大災害5日前。

僕とシオンはデートをした。

シオンがテレビを見てある映画を見に行きたいとはしゃいだからだった。

・・・といっても午前中だけだった。

午後は牧人がベッドを送ってくる予定だった。

この前のドンチャン騒ぎでベッドを一つ壊してしまい、麒麟が譲ってくれた割と新しめのベッドを牧人がくれると言い出したのだった。

僕らは地元の映画館で彼女がお目当ての映画を見た。

青龍刀を作っては考え、そしてまた作るという武器職人の煩惱にについての映画だった。

新しい考えに触れられてそれなりに経験は積めたような感じがした。帰り道、僕らは商店街を歩いていると、

「貴方達、ちよつといいかしら。」という声を聞いた。

振り返ると老婆が杖をついて立っていた。

「あの、何ですか？」僕が言うと、

「来るでしょ？すぐ済むわ。いらっしやい。」と僕らの答えも聞かずすぐそばの家に入った。

仕方がない。僕はもともと敬老精神が豊かなのだ。

シオンの手を握って家の中に入ってしまった。

家の中は一風変わっていた。

円形型の部屋で頭上には惑星があった。

部屋の真ん中には太陽がこの部屋を照らしている。

おばあさんは太陽に手を近づけて、明かりの強さを変えた。

魔法か・・・？

「私は単なる占い師よ。本物の。」僕はその台詞を聞いて確信する。

「占い盤で占つてあげようと思つてねえ。」

おばあさんは銅板を取り出した。

「盤よ。全てを見透かし、この者の未来を占え・・・。」

術？よくわからないが、その手の術らしい。

つてか、普通、答え聞いてから占うよな。

・・・わからん。

「貴方はね、至つてシンプルだわ。」占い師は僕を差し言うつ。

「みんなのことを考えて動く紳士。行動は決まって来ちゃうわ。救

世主には向かないわね。」

ギクリとした。・・・青龍のことを知っているのか？

「そこのお嬢ちゃんの運命と深く絡み合っているわ。あと、この運命は尽きることがないの。大きな盤でやれば分かるかもね。」

占い師はそこまで言うつと首をすくめた。

「あと、最後に近いうちに裏切りが待っているわ。少なくとも、一

週間以内に。」

「馬鹿な！！そんなことは絶対ない！」僕は怒鳴つて占い師のそばに近づいた。

占い師は太陽の下で困つたように微笑んだ。

全てを投げ打つたような笑み。

僕は思わず身震いした。

「信じられないのならいいわ。明後日、アフリカで裏切り者が動くわ。次に、大災害が起きるわ。とてつもない。そして、いざというときはこの袋を開けなさい。いいわね。」

彼女は僕の手之三つの袋を握らせた。

彼女は微笑んで手を払った。

僕らの足は自然と出口に向かった。

僕らは家に帰って袋を開けようとしたが開かなかった。

2時頃

ピーンポーン！ベルが鳴った。

「はい」いつものようにシオンが出る。

「持ってきたよ！」牧人の声だ。

「よっころしょ・・・。」僕が手を貸そうと玄関に出たら・・・。

「ねえ、これ、ヤケにでかくない？」僕は尋ねた。

「ああ、ダブルベッドだもん。」

僕らが啞然としている中、彼は家の中に運び込み、僕らの寝室に置いていった。

「んじやな。」僕は未だに啞然としていた。

大災害4日前

僕は占い師が言っていたことが気になっていたが、今日は学校である。

僕は・・・今回は流石に飛ばなかったが・・・学校に行くと、教室にはレバーが待ちかまえてきた。

彼が西武ライオンズの下敷きで扇ぎながら言った。

「昨日、占い師の館で近々、裏切りにあうって聞いたんだけど・・・。」

「ああ、レバーもか。」僕はホッとした。

「もしかしたら、剛じゃないかって思ってたね。なんか、今日こそこそしているもん。」

む、確かに。

僕は魔耳を取り出し、一部に両面テープを着けて彼に投げつけた。
ピトッ！ナイス！

レバーは彼にしっかり張り付いたのを確認して、僕に話しかけた。
「もし、不審な行為をしたら？」

「即刻、処罰！」僕はキツパリ言い切った。

しかし、彼は挙動不審なだけで何も起こさなかった。

僕は屋上でシオンの作ってくれた弁当を食べた。

卵焼きに砂糖ではなく、塩が入っていた。

塩っ辛い……。

ふと、祐ちゃんが近づいてきた。

「あら、女の子らしいお弁当ね。彼女？」

「うん、まあ、そんなとこかな。」僕は涙目で答えた。

「ふ〜ん。」

「あれ？真は？」僕が尋ねると、

「中野先生に呼び出しをくらっているわ。」祐希ちゃんは微笑みながら答えた。

「ふ〜ん。」

僕らはしばらく外の景色を眺めた。

「夏だねえ……花火とかした？」

「あ、まだ……。蛍もいいよね。」

「いいね。この季節。」

「うん、そうね。」

僕らは他愛もない会話をした。

キンキン。予鈴がなった。

「もう、行かなきゃ。」彼女が立ち上がった。「光君も急いだ方がいいよ。」

「ああ、すぐ行く。」僕がぼーとしながら答えた。

「あつ、そういえば。」彼女が後ろで言う。

「ん？」僕が首をよじって後ろを見た。

「三国志、いつ返してくれるの？」

首がコキッと鳴った。

大災害3日前

この後、たびたび、地震が起きた。

牧人の黄竜眼で、アフリカの方から術を流してプレートを揺さぶっているという事実が判明した。そこで、阿部と烏山総務大臣（九尾）が派遣されることになった。

その日は明後日。

裏切り者がいるということは恐らく、事実だ。

危機は迫っている。

大災害1日前

放課後、僕はとうとう占い師の館に行った。

勿論、シオン付きである。

ん？パトカー？あの館の前だ。

館には『keep out 立入禁止』の黄テープが張り巡らされている。

事情がよく分からない・・・。

仕方ない。ふむ、ちよいと荒っぽいが・・・。

辺りを見渡すと、いかにも新米っぽい刑事がパトカーから降りてきた。

彼は近くに寄ってきた。

「あのさ、ここら辺に公園かコンビニはないかな？」

・・・トイレか。ますます都合がいい。

「ええ、ありますよ。」僕は飛びっきりの笑顔で言った。

僕らは人通りのない路地で彼を気絶させ、マンホールの下に隠した。素早く魔法陣を描き、薄い土を彼の顔そっくりのマスクを作り、自分の顔に貼り付けた。

ついでに彼の服を失敬した。

「どうかな？この刑事に似てる？」シオンに聞くと

「ええ！ばっちりよ。」彼女は笑顔で答えた。

彼女を剣にして、懷に隠すと現場に戻った。

「おう、渡辺！腹は元通りか？」上司らしき刑事が話しかけてきた。

「ええ、もうすっかり。」新米刑事の声色を真似て僕は答えた。

「よし、現場に入るぞ。覚悟しろよ。」

・・・え？

現場に入ると、吐き気が僕を襲った。

老婆は・・・惨殺されていた。

腹を裂かれ、腸がグニョグニョと飛び出ている。

占い師の体は木星のあたりにあったが、心臓が太陽の真下で取り残されていた。

「どう思うよ。この死体。」上司は僕らと手を合わせた後に言う。数秒間、考えて僕はもつともらしい答えを言った。

「かなり恨みを持った犯行ですね。」

「ああ、恐らく、この人が占い師だったことは確かだから、多分、当てにならない占いを信じた馬鹿者の犯行だろう。」

嘘だ。恐らく、邪神の方から手が回ったに違いない。

どうして？しかも何でこんな惨殺を？

「・・・なべ！渡辺！」僕は我に返った。

「どうした？また、腹をこわしたか？」

「大丈夫です。」僕は無理矢理笑みを浮かべていった。

僕は老婆を見ないように部屋を観察した。

壁に色々、写真が貼ってある。

これまで、占いをした人たちだろうか。

最後にレバーが貼ってあった。

他の写真に触りながら考える。あの婆さん、魔法使いだったのか？

僕の写真を軽く触ると、はがれた。

のり付けが甘かったのか？

いや、後ろにろうのような物が・・・。

僕はこっそりその紙を懷に隠した。

その後、夜になってしまったので、僕は素早く姿をくらし、渡辺刑事の記憶を修正した。

そしてシオンを実体化し、帰宅した。が……。

「忍！」僕の部屋の前で牧人とレバーが叫んでいる。

「ああん？どうした？っておいおいおい。」僕の口から否定的な声が漏れ出た。

家捜しされていた。

部屋は荒らされ、散らかり放題である。

居間の窓ガラスは割られていた。

そして、テーブルには無惨にも首が取れた関羽のプラモが転がっていた。

「何じゃこりや……。一体誰が……。」

「……。魔法力の高い連中じゃないと侵入出来ないはず。」

レバーは冷静に答えた。レバーはベランダでロープを拾った。

「確かに。」足下に転がっている趙雲のプラモを見つめながらシオンは答えた。

「とにかく、麒麟様を……。」

「その必要はないと思うけどね。」後ろから声がした。

ボサボサ頭をかき回しながら、青年が入ってきた。麒麟だ。

「んったくよ。」天界だと真夜中なのによ。天使さんが教えてくれたんだよ。」

麒麟は頭をかき回しながら指をはじいた。

途端に三人の……。生物？が現れた。

「実況見分を頼む。」麒麟は呻いた。

「御意。」彼らは部屋の中の指紋を採ったりなど、鑑識がするようなことを始めた。

僕らは為す術もなく見つめていた。

やがて、彼らは再び麒麟の元に集まった。

「指紋は全て拭き取られています。復元の呪文で判別するにはあと何日かかります。」

「足跡も同様です。ただし、日本の西武ライオンズのスパイクに近い形状です。」

「盗まれた物はないようです。しかし、布袋が全て、切り刻まれているのが気になります。」

僕はその言葉にはととなった。

バッグから急いで三つの袋を取り出した。

「それは・・・。」

「占い師がくれた。」僕が簡潔に答えた。

そして、懷から現場で盗んだ紙を取り出した。

無言で術を唱え、手の中で火をつけた。

紙をあぶる。字が浮き出てきた。

『一つ目の袋を開ける。』

僕は指示通りに袋を開けた。

中には『裏切り者』という文字と共に・・・。

レバーの絵が入っていた。

僕の頭の中におばさんから逃げる俳優並みに閃いていく。

彼は西武ライオンズのファンだった。

僕の体を探っていくと・・・ポケットの中に魔耳だ。

シオンが暴走直前にいたのもレバー！

全て、あいつが・・・。

「おい！レバーがないぞ！」牧人が吼えた。

あ、逃げおったか。畜生！

その瞬間、ポケットの中で携帯が震えた。

「はい、光ですが、」

「助けて！光君！飛行機が！」

阿部だった。

もつてっぺんを越した。
次の日になっていた。

大災害直前（後書き）

ハヤブサです。

すみません。かなり長くなってしまいました。

そして、魔法使いシリーズ第五弾。

再び、現実世界と時空のはざまが戦乱の世に！

最終楽章が動き出そうとして・・・いません！

最終ではなくドンドンいきます！

ご期待下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6475m/>

魔法使いの平和？な暮らし

2011年8月29日04時43分発行